秋田蕗
第 31 号
俳人協会秋田県支部報
〔題字〕故 岡田夏生氏

第三十回東北俳句大会・秋田大会が盛況裡に開催される

第三十回東北俳句大会・秋田大会は令和元年九月八日（日）、公益社団法人俳人協会より、小島健常務理事を講師に、また森岡正作評議員並びに東北六県の選者をお迎えし、秋田ビューホテルにおいて開催された。

大会は、事前投句者四百十四名・出句数一千四百十句を数え、大会参加者百二十五名、当日投句百二句、懇親会参加者七十八名で進められた。

なお、大会の運営は、三十五名体制の実行委員会を組織し、前年七月の会場選定にはじまり、四月十三日の第一回実行委員会を皮切りに述べ四回にわたる実行委員会で意思疎通を図り、無事に終了することができた。

大会の詳細については、「俳句文学館・令和元年十一月五日号」に、熊谷尚幹事、泉千穂子監事、森屋慶基幹事の報告が掲載されており以下に再掲する。

主催者挨拶　俳人協会常務理事　小島　健先生

【大会記】

九月八日、秋田市の秋田ビューホテルを会場に、第三十回東北俳句大会・秋田大会が開催された。年号が改まって初の大会に、本部より常務理事・小島健、評議員・森岡正作の両名をお迎えし、東北六県から百二十五名の句友が集った。

十二時三十分に開会。司会は、佐藤景心秋田県支部事務局長。山崎雅葉秋田県支部長が本部をはじめ東北各県支部の本大会への協力に感謝の意を添えて、歓迎のことばを述べた。

秋田県俳句懇話会会長・岩谷塵外氏よりご祝辞を賜った後、保泉草笛秋田県支部幹事による来賓選者等の紹介、神成石男秋田県支部常任幹事による講師紹介と続き、いよいよ小島健氏による記念講演へと移った。演題は「俳句の力」。小島氏は、「俳句には自分と他人を慰め励ます強い力＝俳句力がある」と述べ、時折ユーモアを交えながらの五十分余りの講演に、一同が惹き込まれた。

休憩を挟んで、事前投句の入選句発表、当日投句の入選句発表と続いた。当日投句の披講は、石井美智子秋田県支部幹事、泉千穂子監事が務めた。

小島健氏による事前投句の講評、森岡正作氏による当日投句の講評がそれぞれ行われ、大会賞と特選句の表彰へと進んだ。

最後に、次回大会開催支部を代表して、青森県支部長・小野寿子氏が挨拶。来年九月の第三十一回大会での再会を誓って、十六時五十分に閉会した。（熊谷　尚）

【講演記】

演題「俳句の力」

俳人協会常務理事　小島　健先生

俳句には、さまざまな力がある。

一つは、自然の力。〈滝落ちて群青世界とどろけり　水原秋櫻子〉では、勇壮な滝から力をもらう。こうして自然に励まされ、力を得るのも俳句の力である。

二つは、家族の力。〈今生の汗が消えゆくお母さん　古賀まり子〉では、「お母さん」という言葉がこれほど人の心を濡らす作品を私は他に知らない。

三つは、人間の力。〈今生のいまが倖せ衣被　鈴木真砂女〉は、つくづく今が一番幸せなんだという句である。現在の自分を肯定して毎日を楽しく過ごすことが人生の知恵というもの。

四つは、戦争と平和。〈戦争と畳の上の団扇かな　三橋敏雄〉では、戦争がいつまたやってくるか分からない。戦争の記憶を決して風化させてはならない。

五つは、笑いの力。〈ある時は新酒に酔うて悔多き　夏目漱石〉は、ユーモアがペーソスにまで昇華した上質な笑いの句だ。笑いは人生に不可欠。

現在、俳句は、多くの人に愛されているが、それは五七五という短い定型に季節の言葉を入れた単純明快な文芸だからであり、この「世界で最も短い詩」を私達は誇りとすべきであろう。

俳句仲間との心のふれあいは、人生を豊かにし、優れた俳句作品からは、生きる力と勇気をもらえる。俳句には、自分と他人を慰めて励ます強い力があり、私はこれを「俳句力」と呼んでいる。

俳句は、上達の段階で伸びない時があるが、大きく考えて、人生・俳句は遊びだと捉えると気が楽になる。戦争や災害などの重い深い問題も是非、詠み続けていただきたい。そして、大いに笑って暮らしましょう。どうか、「俳句力」を信じて豊かな俳句人生をお過ごしくださいね。

（泉　千穂子）

小島健先生による講演

【懇親会記】

懇親会は、東北俳句大会・秋田大会の余韻が冷めやらぬ中、十六時定刻に開始した。参加者は、俳人協会常務理事・小島健、評議員森岡正作の両氏をはじめ、東北各県の会員・俳句愛好者など七十八名。

佐藤景心秋田県支部事務局長の司会により、園部蕗郷秋田県支部副支部長が開会の挨拶を述べて開始。ここで、飛び入り箏曲の演奏が行われることとなり、神成石男秋田県支部常任幹事より紹介が行われた。

演者は、生田流宮城会宗家直門大師範野口裕子氏で、箏曲「秋の曲千鳥の曲」が演奏され、会場はその厳か

園部副支部長による開会挨拶

な音色にしばし魅了された。

次に、鈴木正子山形県支部長から、秋田大会が成功裡に終了したことを喜ぶご挨拶とともに、乾杯のご発声があった。

会場は、和気藹々に歓談の輪が広がり、あっと言う間に地域を超えた友好が深められた。

十七時三十分、水越洋三秋田県支部副支部長の閉会挨拶があり、次回、青森大会での再会を約束して散会となった。

（森屋　慶基）

琴の演奏

小島先生・森岡先生を囲み懇談

令和二年度 県支部俳句大会の講師にご来県予定の 長嶺千晶先生

先生は昭和三十四年東京生まれ。

昭和五十七萬緑入会。

平成元年萬緑新人賞。二年萬緑同人。十六年萬緑賞。十七年退会。十八年「ににん」入会。二十三年第四句集「白い崖」で吟遊俳句賞。第十五回夢二俳句大賞。二十四年「ににん」退会を経て同人誌「晶」創刊、代表。二十六年俳人協会評論新人賞。

俳人協会幹事、世界俳句協会会員、日本文藝家協会会員。

句集に「晶」他四冊。評論集一冊。

令和二年度 各種大会の予定

○俳人協会第五十九回全国俳句大会
・令和二年四月十五日（締切）

○俳人協会秋田県支部俳句大会
・令和二年五月十七日
・協働大町ビル

○俳人協会東北俳句大会・青森大会
・令和二年九月六日
青森市・青森国際ホテル

○第三十五回国民文化祭・みやざき２０２０
・「神話のふるさとみやざき」全国俳句大会
・令和二年十一月十四日・十五日
・宮崎市・宮崎市民プラザオルブライトホールなど

○第二十九回吟行俳句大会
・十一月上旬（予定・案内通知）

○第二十四回支部会員鍛錬紙上句会
・十一月中（予定・案内通知）

公益社団法人俳人協会

第三十回東北俳句大会・秋田大会入選作品

【大会賞】

除雪車の一燈統ぶる朝まだき　山形　伊藤　厚子
切り出しの木の香を残し馬橇行く　宮城　幸野　峰
みづうみの五月雨あをし昼の酒　福島　橋本　研二
なまはげの野太き声は夫のこゑ　福島　古市　文子
ひとまはり大きく春の山と子と　宮城　遠藤　克子
耕してたがやして嬰を抱いて寝る　青森　小野　寿子
足裏より家郷の鼓動青き踏む　秋田　和田　仁
橅林の風にさはだつ五月来ぬ　山形　三澤カツコ
母の声しみたる絵本黴香る　秋田　遠藤　史都
うるむ灯や母と一と夜の花の宿　秋田　最上　悦
ほととぎす影鳥海の裾に啼く　宮城　木村螢雪子
編みたてのあをき竹籠夏きざす　岩手　二階堂光江

【特選】

小島　健　選

除雪車の一燈統ぶる朝まだき　山形　伊藤　厚子
切り出しの木の香を残し馬橇行く　宮城　幸野　峰
みづうみの五月雨あをし昼の酒　福島　橋本　研二

伊東　肇　選

なまはげの野太き声は夫のこゑ　福島　古市　文子
ひとまはり大きく春の山と子と　宮城　遠藤　克子
耕してたがやして嬰を抱いて寝る　青森　小野　寿子

檜　紀代　選

足裏より家郷の鼓動青き踏む　秋田　和田　仁
橅林の風にさはだつ五月来ぬ　山形　三澤カツコ
母の声しみたる絵本黴香る　秋田　遠藤　史都

染谷秀雄　選

うるむ灯や母と一と夜の花の宿　秋田　最上　悦
ほととぎす影鳥海の裾に啼く　宮城　木村螢雪子
編みたてのあをき竹籠夏きざす　岩手　二階堂光江

土井三乙　選

これはこれはと彼岸の雪を掻きにけり　秋田　石川あきら
雪に膝つきて鷹匠鷹放つ　山形　折原　廣子
とりあへず諾と答へて冷奴　青森　今田とみを

浜田しげる　選

耕してたがやして嬰を抱いて寝る　青森　小野　寿子
幾重にも水抱くやうに紙漉女　山形　横道輝久子
母の日も一と日の母の仕舞風呂　青森　成田　政美

白濱一羊　選

竿灯のいちど倒れて倒れ癖　秋田　佐藤　景心
昼告ぐる声滑りゆくぬなは沼　秋田　伊藤　青砂
空港の国旗持ちたる雪だるま　山形　結城トミ子

馬場吉彦　選

薬缶のる茂吉旧居の夏火鉢　山形　小室けい子
切つて知る蜜入り林檎寺山忌　宮城　伊藤　一男
穂孕みの稲に水張る原爆忌　宮城　伊藤　一男

坂内佳禰　選

雪に膝つきて鷹匠鷹放つ　山形　折原　廣子
竜笛の洩れくる当屋雪月夜　山形　伊藤　厚子
未だ誰も潜らぬ茅の輪匂ひけり　秋田　山内　誠子

小林里子　選

郷倉は野に還り行く独活の花　山形　庄司　玲子
幾重にも水抱くやうに紙漉女　山形　横道輝久子
未だ誰も潜らぬ茅の輪匂ひけり　秋田　山内　誠子

鈴木正子　選

なまはげの野太き声は夫のこゑ　福島　古市　文子
囀や行くも戻るも渡し舟　岩手　篠村恵美子
父母に竿灯見せむ初任の地　青森　小林　とみ

黒坂重政　選

天を蹴る赤児の力雲の峰　秋田　和田　仁
三寒へ摺り足返す能舞台　山形　伊藤　厚子
合歓咲くや空と溶け合ふ羽後の海　福島　佐久間晃祥

橋本研二選

袋掛く空の青さを包みては　秋田　園部　蕗郷
切り出しの木の香を残し馬橇行く　宮城　幸野　峰
神の言葉子に宿るらし星涼し　岩手　菅原　信子

横山節哉選

かまくらの招くわらべの訛りかな　秋田　工藤　進
小鳥来る小坂芝居の木戸口に　宮城　江戸　裕子
三代の読み継ぐ絵本銀河濃し　青森　安田真知子

山崎雅葉選

水草生ふ濁りし水の力得て　青森　小野　寿子
人よりも犬猫愛し万愚節　秋田　佐々木踏青子
心経に始まる春の念珠廻し　福島　葉貫　琢良

佐々木踏青子選

涅槃図の余白の滲み泪とも　山形　横道輝久子
散りてまた姿を隠す山桜　山形　松尾　正夫
海光を掬ふ鷗のうららけし　秋田　最上　悦

当日投句

【大会賞】

森岡正作選

牛飼の牛にも序列牧の秋　秋田　佐々木公平
身にしむや母につくうそひとつ増え　秋田　佐々木アヤ子
羽前羽後分けて鳥海天高し　宮城　小泉　三男

【特選】

小野寿子選

青いのが豆白いのが蕎麦畑　山形　伊藤　寛

及川茂登子選

落し水集めて海へ雄物川　福島　橋本　研二

伊藤寛選

ぶつかってきさう白神の夏燕　福島　古市　文子

鶴岡行馬選

羽前羽後分けて鳥海天高し　宮城　小泉　三男

古市文子選

杭残るだけの廃村虫時雨　秋田　加瀬谷敏子

伊藤青砂選

水音を集めて蓮の実となれり　宮城　山田　史子

斎藤淳子選

羽前羽後分けて鳥海天高し　宮城　小泉　三男

石井露月顕彰 第六十二回全国俳句大会 支部員の成績

令和元年九月十四日、秋田市等が主催し、当支部が後援する石井露月顕彰第六十二回全国俳句大会が開催された。支部員の成績は次のとおりであった。

佐藤景心選

入選　爽やかや母となる日を数え待つ　桜庭　睦
同　林泉の木にも水にも秋のこゑ　西東　善秋
同　降り止まぬ雨や沖縄慰霊の日　宇佐見レイ子

岩谷塵外選

秀逸　幽霊の足の出てゐる村芝居　大野　一郎
同　降り止まぬ雨や沖縄慰霊の日　宇佐見レイ子
入選　幼子のはじめての下駄春うらら　田村　陽子
同　露月忌や生涯抜けぬ出羽訛　髙橋　一秋

宮本秀峰選

秀逸　雄物川河童にさせた夏休み　岡部いさむ
入選　妻の乗る小さき茄子の馬つくる　大野　一郎

第二十二回 支部会員鍛錬句会の成績

秋田県支部では、平成三十年十二月十四日を投句締切として第二十二回支部会員鍛錬句会を実施、七十七名が参加した。

特定選者による入選句、互選高点句は次のとおりであった。

今井　聖　選

特選　昆布売り潟の時雨を連れて来し　浅野　法子

【評】海辺の街の景観の中での生活が見えて来る。行商の昆布売とそれを囲む客の風情。そこへ降り出した時雨。全体が暗いトーンで統一されていて、優れた映像的カットを見るように動きが展開してゆく。「時雨を連れて来し」の擬人法も的確で作者の構成力の確かさがうかがわれる。

特選　マフラーを外すや舞台中央へ　小杉　茶泉

【評】劇中の俳優の動きか。表彰式などで舞台に登壇した一般客の動きか。後者だとマフラーを外す行為が当たり前で感動が薄い。前者と取りたい。芝居だと取ると、マフラーを外す行為は何を意味するのだろうか。外から建物内へ移動することの暗示だとすると、これからエネルギッシュな台詞のやり取りが始まるのかも知れない。

秀逸　日を集めまた集めては屋根雪崩　加藤　百桜

同　なまはげのトラウマならん夜泣きの子　佐々木踏青子

同　なまはげの人に会はねば人の声　佐藤　景心

佳作　魚屋の粗の皿盛り冬はじめ　高田　洋子

同　内側に握る親指寒夜かな　木村　登龍

同　除雪車に目覚めてをりぬ午前二時　園部　蕗郷

同　この顔の七十年や初鏡　松山　蕗州

同　日短を口ぐせにして何もせず　真壁　桂子

同　柔らかく人を拒みぬちゃんちゃんこ　小川　千草

同　何事も寺が目印吊し柿　小川　千草

同　ゆるゆると床屋に行くか冬ぬくし　遠山せつ子

同　鳥に遣る赤き実残し囲いせり　明沢　榮子

同　風花の渡りきれざる大河かな　熊谷　尚

岩谷　塵外　選

特選　寒行に発つ一礼はあめつちへ　柳川　大亀

【評】季語「寒行」は、寒中の三十日間寒苦に耐えて、座禅・托鉢・誦経・念仏・題目などそれぞれの宗旨に従って精進することであるが、掲句の場合「寒行に発つ」の措辞から、托鉢に向かう雲水を詠んだものと推測される。寺を出る際の雲水の姿・心情が「一例はあめつちへ」の措辞に凝縮されている。無駄のない凛とした句柄に惹かれた。

秀逸　魚屋の粗の皿盛り冬はじめ　高田　洋子

同　音たつるもの立てぬもの木の葉雨　二藤　誠祥

佳作　添書きの余白はみ出る年賀状　佐藤　茂樹

同　暮の市栗山名画見る如し　松橋テル子

同　初雪や里山に浮く大文字　塚本　佐市

同　エプロンに気合ひを入れて今朝の冬　伊岡森礼子

同　冬靴の鋲戛戛（かつかつ）と地下広場　神成　石男

工藤　ミネ子　選

特選　安来節一歩は雪を踏むやうに　工藤　進

【評】この句を一読し、ハッとしてしまいました。それは、中七・下五の「雪を踏むやうに」の措辞でした。安来節は、今まではただユーモラスで皆を楽しませる踊とばかり思っていました。それが、中七と下五の措辞で、自分の心にしっかりと引き寄せている作者の心の深さを感じさせられた一句と思いました。

秀逸　わだなかに光の橋や寒落暉　岩谷　塵外

同　寒月の雲寄せつけぬ高さかな　大原たかし

佳作　魚屋の粗の皿盛り冬はじめ　高田　洋子

同　唐辛子ひとまづ笊に干されけり　瀬田川博子

同　攻撃の鋏をかざす蟹を買ふ　高橋みつを

同　お日様の恵方八方大御空　伊藤　沐雨

同　いろいろとあつた九十歳除夜の鐘　伊藤　沐雨

泉千穂子　選

特選　寒行に発つ一礼はあめつちへ　柳川　大亀

【評】寒行に向かう気持ちが「一礼はあめつちへ」に凝縮されている。一礼は天地、そして寒行の無事を祈る人へも向けられていると同時に、覚悟も込められている。あめつちをひらがなにすることで、見通しの明るさを詠んでいるように思う。

秀逸 菰巻の松にほどよき曲りぐせ　加藤　一弥
同 初日影秋田蘭画に遠近法　山内　誠子
佳作 音たつるもの立てぬもの木の葉雨　二藤　誠祥
同 枯芝に豊かな日差し鳥の影　伊藤恵美子
同 片減りの墨平らかに淑気かな　齋藤　善秋
同 山河知り尽せる納屋の輪樏　柳川　大亀
同 かたくなに昭和の手法雪囲　森屋　慶基

互選の得点順位（⑥点まで十三句）

一席⑩魚屋の粗の皿盛り冬はじめ　高田　洋子
一席⑩寒行に発つ一礼はあめつちへ　柳川　大亀
一席⑩平成の過ぎゆく余韻除夜の鐘　佐藤柳四郎
四席⑨寒月の雲寄せつけぬ高さかな　大原たかし
五席⑦安来節一歩は雪を踏むやうに　工藤　進
五席⑦菰巻の松にほどよき曲りぐせ　加藤　一弥
五席⑦折鶴にいのち吹き入れ冬籠り　塚本　佐市
五席⑦かたくなに昭和の手法雪囲　森屋　慶基
五席⑦紙風船上げて冬田の空焦がす　熊谷　尚
十席⑥昆布売り潟の時雨を連れて来し　浅野　法子
十席⑥島一つ鵜呑みにしたる寒怒濤　和田　仁
十席⑥除夜の鐘一打の刻も過去となり　渡部　京子
十席⑥なまはげの人に会はねば人の声　佐藤　景心

第三十六回奥の細道象潟全国俳句大会 入選作品

令和元年八月三日、にかほ市・象潟公民館で開催された第三十六回奥の細道象潟全国俳句大会における当県支部員の入選作品は次のとおりであった。

今瀬剛一選

特選 淀む水流るる水や花菖蒲　神成　石男
佳作 雲海を誉め雲海の上歩く　森屋　慶基
同 女湯に女の消えて虫のこゑ　佐藤　景心
同 象潟の島々残し田水張る　園部　蕗郷
同 牛群の移動はじまる大夏野　佐々木公平
同 白魚網叩きてひかり集め獲る　塚本　佐市
同 象潟や青田の海に九十九島　髙橋　一秋
同 木の洞を埋めつくしたる梅雨茸　五十嵐義知

公益社団法人俳人協会主催 第五十八回全国俳句大会 入選作品

令和元年九月十日、東京・有楽町朝日ホールで開催された第五十八回全国俳句大会における当県支部員の入選並びに予選通過作品は次のとおりであった。

なお、今大会の投句総数は一万三千五百三十句、予選通過作品は一千五百三十三句であった。

鷹羽狩行選

入選 厩出しの嘶き嶺に吸はれけり　岩谷　塵外

予選通過作品

厩出しの嘶き嶺に吸はれけり　岩谷　塵外
フラスコの微塵子躍る春の水　岩谷　塵外
陶窯の攻め焚き紅葉濃くしたる　和田　仁
波の音は地球のあかし天の川　和田　仁
朧月ふたり暮しにいつか慣れ　二藤　誠祥
哺乳壜吸ふ子の力燕来る　塚本　佐市
春泥や角振る牛の四肢太し　藤原貢太郎

公益社団法人俳人協会主催 第二十六回俳人協会俳句大賞 入選作品

令和元年十二月五日、第二十六回俳人協会俳句大賞が発表され、支部員の入選作品は次のとおりであった。なお、今大会の投句総数は六千五百五句であった。

鈴木しげを選

入選 鮎釣の鮎塚に来て憩ひけり　小松雄一

「あきたの文芸」第五十二集 支部員の成績

令和元年十一月十五日、秋田県が主催する「あきたの文芸第五十二集」が発表された。支部員の成績は次のとおりであった。

◇最優秀賞

「山の日」　石井美智子

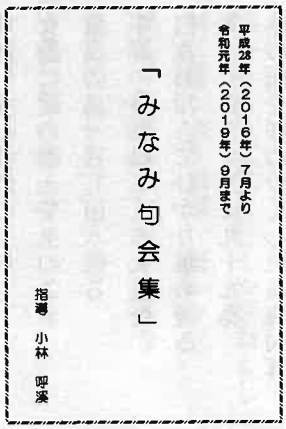
◇入選

「母の里」　田村陽子

【句集紹介】

令和元年に会員が所属する句会から二誌の合同句集が上梓された。

みなみ句会集



硫黄泉近き山道落し文　大石愛子
梅雨出水水の匂ひの橋の上　後藤桂
新涼やきらりと光るイヤリング　橘節子
月代や妻のうしろに夫の居て　加瀬谷敏子
山頂は風に尾花の揺るばかり　麻生白風
まとひつく水引草を束ねたり　二藤誠祥
豆植うや土鳩にやるも数のうち　木村理記夫
戦時下の女性さながら出初式　高橋みつを
入替の貨車の響きや霜の夜　佐伯比呂志

四季第三句集

巫女の衣の折目正しく淑気満つ　伊藤青砂
初湯して母の背丸く洗ひけり　今川悦子
ユーモアも長寿の秘訣福笑　加藤二三郎
マニキュアの薄紅色で破魔矢受く　川尻弘子
元旦や何も変はらぬ家の在り　黒田紀子
すこやかに菜を刻む音初厨　坂本和子
雑煮椀蓋の裏には鶴の舞ふ　佐々木あや子
去年今年煩悩断つる鐘の音　佐々木駸悦
破魔矢手に意気揚々と父の背　島きく子
クレーンの空に伸びゆく初仕事　田村幸子
初茜眠らぬ街の寝入りばな　戸松好造
焼印の残る鍬の柄別れ雪　藤山尭

基金協力者のご紹介

平成三十一年三月から令和元年十二月までの間基金にご協力いただいた皆様を紹介します。

基金は、九月八日開催された第三十回東北俳句大会・秋田大会に三十七万七千三百二十四円を拠出し、現在までの累計額は百六十四万八千百三十一円となりました。今後とも支部活動に適正に活用させていただきます。

（敬称省略）

〔県南地区〕
麻生白風・阿部清流子・安倍幸一・石川恵美子・伊藤瑠紅・大石愛子・小川千草・小川照女・加瀬谷敏子・加藤栄女・鎌田麗子・小坂富子・小林呼溪・小松敏郎・西東善秋・斎藤淳子・澤田トキ・東海林信子・瀬田川博子・高橋みつを・滝澤幸子・照井志げ女・遠山せつ子・二藤誠祥・根岸一九・藤原貢太郎・真壁桂子・森屋慶基・矢野雪男・山崎雅葉・渡辺素女

〔由利本荘地区〕
五十嵐義知・佐藤柳四郎・藤井淳一

〔中央地区〕
伊岡森礼子・泉千穂子・伊藤恵美子・伊藤慶子・伊藤青砂・岩谷塵外・宇佐見レイ子・岡部いさむ・小野祐子・加藤一弥・神成石男・木村登龍・熊谷尚・佐々木踏青子・佐藤景心・佐藤茂樹・佐藤悠水・島きく子・鈴木東亜子・高田洋子・千葉糸子・寺田恵子・藤原よう子・保泉草笛・水越洋三・山田恵子・山内誠子・米屋道子

〔県北地区〕
浅野法子・石井美智子・伊藤杯紅・伊藤沐雨・工藤ミネ子・櫻庭睦・田村陽子・塚本佐市・柳川大亀

深慮・浅慮

九月二十四日青森市の青森国際ホテルで開催された北海道・東北地区評議員懇談会に出席した。本部から野村研三理事長・染谷秀雄事務局長、東北地区から六名の評議員が出席。本部から、会員が一万五千三百五十七人で男女比が一対二であること、九十歳以上・五十歳以下・六十歳代がそれぞれ一千人程度、七十～八十歳代がほとんどで平均年齢が七十六・一歳であること、俳句文学館の図書の電子化を進めていること、２０２１年に六十周年を迎える記念事業の進捗状況などが紹介された。

その後、意見交換等が行われ、小子から、支部の会員動向の報告とともに、本部会員でありながら支部に加入しない者がいる実態を踏まえ、これを解消する対策を講じていただきたいことを要望。他に、「絵はがきセット」が古いため会員の評判が悪いこと、ホームページの俳句検索で季語の傍題を一々出さなければならない不便さがあることについて善処を要望し、検討する旨の回答があった。

他の評議員からも、本部提供賞品「吟行案内」の配布方法や若い会員の会費軽減方策、俳句カレンダーの掲載方法等について要望等が行われた。

また、会議で全国的に課題とされたことは、会員の高齢化と若手会員の拡大方策である。当県支部員の高齢化も今後の支部活動に影響を及ぼしかねない状況にあり、これに対する対策は喫緊の課題である。俳句は「生きる力を与える存在」であることはこれまでも述べてきたが、より一層その思いを強くしたところであった。

（景心）

支部員消息

平成三十一年・令和元年

【三月】

☆**田村陽子氏**　「第十三回角川全国俳句大賞」で「少年の目をして夫のバレンタイン」が秋田魁新報社賞受賞。

【五月】

☆**小林呼溪氏**　俳誌「朱雀」（田中春生主宰・堺）５・６月号「狩行山脈ー鷹羽狩行先生とその師系の人々」（太田かほり）に「後になり先になりして雪女郎」（昭和五十八年作）が、評とともにとりあげられる。

☆**森屋慶基氏**　二十日、横手かまくら吟社会長に就任。

◇「俳壇年鑑」（五月号本阿弥書店発行）「諸家自選作品集」に次の方々が収録される。

☆**池田崇氏**　「吾が庭と大言壮語す山眠る」

☆**小川千草氏**　「這ひ這ひの家族も揃ひきりたんぽ」

☆**園部蕗郷氏**　「秋立つや畑にさやぎの雨の音」

☆**佐々木踏青子氏**　「現世とはおもひたくなき花野かな」

☆**柳川大亀氏**　「じやじや馬に育つもよろし青き踏む」

☆**山崎雅葉氏**　「本復を期する八十路の初薬師」

【七月】

☆**小林呼溪氏**　俳誌「滝山」（桑島啓司主宰・和歌山）７・８月号に「うたごころ・共鳴十句」を寄稿。

【八月】

☆**佐藤景心氏**　俳句文学館八月五日号に四月二十一日開催された支部総会を紹介

【九月】

☆**山崎雅葉氏**　二十四日、青森国際ホテルで開催された北海道・東北地区評議員懇談会に出席。

☆**佐藤景心氏**　同じく北海道・東北地区評議員懇談会に出席。

【十月】

☆**小林呼溪氏**　十九日、指導通信句会「みなみ句会」（隔月）二十回を記念して「みなみ句会集」を作成。

◇二十日、秋田市・生涯学習センターで開催された秋田魁新報社主催第九十二回全県俳句大会（選者岸本尚毅）で次の方々が入賞した。

☆**宇佐見レイ子氏**　秀逸「笛太鼓手だけで踊る車椅子」

☆**山田恵子氏**　秀逸「笑内駅をぐるりと茸山」

☆**佐々木公平氏**　互選高点句一位「いつせいに牛立ち上がる大夕立」

☆**加瀬谷敏子氏**　互選高点句五位「満月や薪積む家に母独り」

☆**佐藤景心氏**　魁新報の文化欄「俳壇」選者となる。

【十一月】

☆**伊藤青砂氏**　「四季第三句集」（四季俳句会）の監修に当たる。

☆**熊谷尚氏**　俳句文学館十一月五日号に九月八日開催された第三十回東北俳句大会・秋田大会（俳句大会）を紹介。

☆**泉千穂子氏**　同じく第三十回東北俳句大会・秋田大会（講演）を紹介。

☆**森屋慶基氏**　同じく第三十回東北俳句大会・秋田大会（懇親会）を紹介。

☆**岩谷塵外氏**　五日、秋田市文化章受章

☆**熊谷尚氏**　十五日、県文化振興課主催の「あきたの文芸」俳句部門の選者として選評

☆**岩谷塵外氏**　同じく「あきたの文芸」俳句部門の選者として選評

☆**和田仁氏**　同じく「あきたの文芸」俳句部門の選者として選評

【十二月】

◇九日、東京都新宿区・駐日大韓民国大使館・韓国文化院で開催された国際俳句交流協会主催第二十一回HIA俳句大会で次の方々が入選した。

☆**和田仁氏**　鷹羽狩行選「蜜月のごとく老父母青き踏む」

同じく鷹羽狩行選「祝婚のミサに紛れて夏の蝶」

加藤耕子選「山国の闇に贅あり天の川」

☆**加瀬谷敏子氏**　大輪靖宏選「森の風梳くや少女の洗ひ髪」

☆**保泉草笛氏**　十三日、「さきがけ読者文芸」（十～十二月）で推薦作家となる。選者佐藤景心。

◇十八日、青森県深浦町主催白神山地世界自然遺産登録記念第二十五回全国俳句大会で次の方々が入賞する。

☆**和田仁氏**　**大賞**「白神は大きな楽器蝉時雨」

☆**髙橋一秋氏**　**佳作**「茸採り獣の匂ひに引き返す」

令和二年

【一月】

☆**園部蕗郷氏**　令和二年版「俳句カレンダー」三月号に「初燕空にあたつて弾けけり」を掲載。

☆**岩谷塵外氏**　同じく三月号に「走りては吾を待つ犬や木の芽晴」を掲載。

☆**佐藤景心氏**　同じく三月号に「一村を一望秋田杉を植う」を掲載。

◇一日、魁新報社新年文芸に次の方々が入賞する。

☆**斎藤淳子氏**　第二席「注連縄の垂れたる尾より初明り」

☆**藤原貢太郎氏**　佳作「もてなされなまはげ唸り礼を言ふ」

☆**岡部いさむ氏**　佳作「若水をにはとり首を上げて呑む」

☆**宇佐見レイ子氏**　佳作「空気さへ白しと思ふ大旦」

☆**石井美智子氏**　佳作「顔拭くもいやいやの児の初泣す」

令和元年度支部役員

〔顧　問〕佐々木踏青子（本部幹事）・伊藤恵美子・伊藤青砂・石川恵美子

〔支部長〕山崎雅葉（本部評議員）

〔副支部長〕木村登龍・園部蕗郷・水越洋三・佐藤景心（本部評議員・事務局長）

〔常任幹事〕小杉茶泉・工藤ミネ子・神成石男・斎藤淳子・岩谷塵外

〔幹　事〕森屋慶基・保泉草笛・山内誠子・伊藤慶子・熊谷尚・石井美智子（新）

〔監　事〕泉千穂子・佐藤茂樹（新）

人事関係紹介

☆本部新会員（令和元年十一月五日）

加瀬谷敏子氏（百鳥・新雪）
泉千穂子氏（香雨）

☆加入新会員

・県南地区
阿部清流子氏（無所属）

☆退会会員

・県南地区
高橋美代女氏（いなかわ俳句会）
田中秋峰氏（増田町俳句連盟）
見田英子氏（春燈）
石垣一舜氏（嘶吟社）

・由利本荘地区
松山蕗州氏（新雪）

・中央地区
木田橋敬一氏（土崎俳句研究会）
和田仁氏（天為）
渡辺京子氏（香雨）

訃音

●進藤芽風氏（夏爐・ホトトギス）
令和元年九月三日ご逝去
享年九十五歳
謹んでご冥福をお祈り申し上げます
合掌

北斗星

年齢を重ねるごとに、月日のたつのが早く感じられる。江戸前期の儒学者貝原益軒は「養生訓」で「老後は、わかき時より、月日の早き事、十ばいなれば、一日を十日とし、十日を百日とし、一月を一年とし、喜楽して、あだに日をくらすべからず」とつづっている▼ついこの間まで正月気分に浸っていたと思ったら、もう2月も9日となった。月はぎカレンダーもあっという間に2枚目である。わが家では今年、少しばかり趣向を変えて「俳句カレンダー」（俳人協会発行）を飾っている▼本紙文化欄の俳句選者の1人でもある秋田市の佐藤景心さん(68)から頂いた。芸能人が1句ずつを披露して、俳人の夏井いつきさんが「才能あり」「才能なし」などと厳しく評価するテレビ番組に触発され、ある会合で「俳句が面白い」と話したところ、持ってきてくれた▼毎月40句前後が掲載されている。季節の移ろいが細やかに詠まれており、それぞれの一句に込められた思いに想像は膨らむ。3月には佐藤さんの「一村を一望秋田杉を植う」が載っている▼わずか17音の中に、季語を織り込み、独自の世界を表現する。それだけに奥が深い。「句作を通じて自らが生きていることを実感でき、これからも生きていこうとする力が湧いてくる」と佐藤さんは語る▼貝原益軒が記しているように無駄に日々を過ごさないためには、趣味や打ち込めるものを持つことが一つの方法である。今年は俳句の世界の門をたたいてみようか。〈2020・2・9〉

令和2年2月9日付け秋田さきがけ～俳句カレンダー紹介～

編集後記

★当支部が前年の秋から準備を進めた第三十回東北俳句大会・秋田大会は、実行委員会を組織して無事に終えることができた。この間の関係各位に心から感謝を申し上げたい。

★令和元年九月にはじまったラグビーワールドカップ日本大会では、日本チームの外国人ヘッドコーチが俳句で選手を鼓舞して勝利に導いたことが報道された。

また、十一月に行われた天皇陛下の即位を祝う式典では、女優の芦田愛菜さんが天皇陛下と奥の細道との関わりに言及した祝辞を述べた。これらの出来事は、俳句が日常生活と深く関わっていることの証左であり、俳句と係わるものとして誠に嬉しく思ったところである。

★当支部員は、今年度、御逝去を除き八名が退会したが、退会の主な理由は高齢によるものである。支部員の高齢化は全国の例に漏れず進んでおり、新規加入がままならない現状では、支部の縮小は続いていくものと思われる。しかし、「俳句は生きる力を与える存在である」ことはこれまでも述べてきたところである。各位の活動の周辺に俳句の良さを伝え、支部の発展に努めていただきたいものである。

★「秋田蕗」は支部と支部員の架け橋である。支部員の句集上梓、各種大会での活躍状況、指導句会立ち上げ・変更、訃報など、自薦・他薦を問わず早めに事務局までお知らせいただきたい。（景心）

俳人協会秋田県支部
事務局・会計・「秋田蕗」編集発行
〒〇一〇－〇八〇二
秋田市外旭川字大畑五八－四　佐藤　景心
電話　〇一八－八六八－〇七四四
携帯　〇九〇－二二七一－〇六四二
メールアドレス　keisin53@cna.ne.jp
ゆうちょ銀行振替
口座番号　02290－9－127266
俳人協会秋田県支部
印刷
有限会社　三浦印刷
郵便番号〇一〇－〇九二五
秋田市旭南三－七－五
電話〇一八－八六二－二七九二

秋田蕗第31号で誤りがありました。訂正してお詫びいたします。

箇所	誤	正
6ページ上段	平成三十三年十二月	平成三十年十二月
6ページ中段	〔評〕中の…「一例はあめつちへ」…	〔評〕中の…「一礼はあめつちへ」…